

# 新聞小説史年表 内容及び特色

## 内容

本書は、文久二（一八六二）年より昭和三〇（一九五五）年までの年表よりなる。収録した新聞小説の期間は、明治八年より、昭和三〇年一月まで。  
付録として、「万朝報」紙上で明治三〇年より大正一五年の間募集された懸賞短篇小説をリストアップ、年表化して併載。

## 特色

生涯を第一線のジャーナリストとして生きた著者のライフワーク「新聞小説史」の掉尾を飾る年表の刊行である。  
『新聞小説史 明治篇』『同 大正篇』『昭和篇』、『昭和篇 II』執筆の基礎資料となった作家別年表・新聞別年表を統合整理し、文久二年より昭和四〇年までの基礎年表を作成。これを原稿として、一つ一つ、新聞小説切り抜きや、マイクロフィルム化されて保存されている各新聞といった原資料にあたり直し、記載事項を確認した決定版新聞小説資料である。  
○実地にあたった新聞だけで八十数紙、調査の及んだ総新聞紙数は二〇〇に上る。  
○新聞小説の作品名、作家名に加え、担当挿絵画家の名前も可能なかぎり採集・収録した。  
近代文学、大衆文芸、美術史等の研究者に、また、図書館等公共機関に広くお薦めいたします。

◆体裁 B5判(縦二五七ミ、横一八二ミ)  
上製クロス装・貼函入・四〇〇頁  
◆定価 一、二、〇〇〇円

# シリーズ新聞小説史

新聞社の営業方針・経営戦略という媒体側の動機と、作家の芸術的欲求という創造側の動機との衝突の狭間から生まれ出た、日本独自の文芸ジャンルである「新聞小説」。この前人未踏の分野に初めて分け入り、論述された通史として本書は、資料的価値が高い。自身、生涯を新聞記者として生きた著者の目は、新聞社幹部と作家の間関係に、名作誕生の誘因を見、また、最初期の新聞小説作者であった新聞記者達の業績を文化史上に高く位置づけ再評価を迫る。連載当時読者を熱狂させたながら、通俗小説として名も残らなかった幾多の作家達の小説群に、現在にまで残る大作家の文学的名作と同等に光を当て、もう一つの日本文壇史を描き出す。

- 新聞小説史 明治篇  
総六〇〇頁 定価五五〇〇円  
芸術選奨文部大臣賞受賞
  - 新聞小説史 大正篇  
総三五〇頁 定価五五〇〇円
  - 新聞小説史 昭和篇 I  
総三二〇頁 定価六五〇〇円
  - 新聞小説史 昭和篇 II  
総三三〇頁 定価六五〇〇円
- 高木健夫著 A5判上製函入

【取扱い書店】 小社の書籍は注文制です。書店にお申し込み下さい。

【発行所】

## (株)国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18  
〒170 電話 03-917-8287  
振替 東京 5-65209番

# 新聞小説史年表

## 高木健夫 編

「を渡されて既し漸しも整つ

其日の夕方金之助の支扇の用と納めて後件の旅宿へ飛で  
行き見「新聞小説」日本独自の文芸ジャンルの初めに  
互ひの無光をあて、近代日本の文壇裏面史を浮彫りにする  
へ来られてうら難辛苦の浮城子退くのみ書簡で親  
公達も承知も腹で案事てお在ささらんが壯年者の  
心得違ひ悪いと思ひ當るまで難行苦行をさせるのが却つ  
て渠が身の爲と打捨て置れるを私達も見聞をしてお氣の  
毒と思ひあがら口を出される譯でもなく陰で心配をし  
て居るうち内小蝶の品行を探索があつた所藝妓も似合  
ぬ正しい者まで殊も母へも孝を盡し先頃か前も異見を加  
へ旅費まで恵んだ志操を親公が聞いて感心され然ういふ質  
意のある婦女から嫁よしたいと相談があるも渠も承知の  
趣き故  
たうら急よお前を呼迎へて呉るとのお頼みも整つ  
私に来  
送り越  
親の慈  
坂へ来  
此種論るも不本意も承て當年一ぱいも此地で家いだ其



国書刊行会



◆年表の見方

〔新聞・雑誌〕  
新聞・雑誌の創刊・廃刊・改題を示す。新聞は「」、雑誌は「〱」。  
例 「扶桑新報」が名古屋で創刊され、「自由燈」が「燈新聞」と改題した。

〔作 品〕  
作品名(作者名、画)挿絵画家名「掲載新聞名」(掲載月日) 回数 の順に示す。  
例 「今日新聞」1月2日から2月6日にかけて、江東みどりというペンネーム(実は齋藤緑雨)で挿絵が稲野年恒・尾形月耕の、善悪挿絵羽子板 という小説が連載された。

〔人 物〕  
関係人物の生没を示す。  
作家、画家、新聞記者など。  
例 木下利玄1月1日生れ  
小野梓1月14日没  
年35歳。

〔事件・風俗〕  
世相をよく物語る事件・風俗 刊行された書籍、地方新聞に報道された出来事などを示す。

明治18年12月～

明治18年 <1885>	明治19年 <1886>	新聞・雑誌	作 品	人 物	事件・風俗
12月	1月				
	「扶桑新報」(名古屋) 「自由燈」→「燈新聞」		破笠松村雨(渡邊寛之)「岐阜日日」 小車物語(渡邊寛之)「岐阜日日」 仇風花村裏(渡邊寛之)「岐阜日日」 胡蝶草紙(渡邊寛之)「岐阜日日」 月の紅葉(渡邊寛之)「岐阜日日」 二葉草(渡邊寛之)「岐阜日日」 黒岩鏡巻(松入自由) 飯田余話(松入自由) 花王樹草(作者不明、画年恒)「松入自由」 善悪挿絵羽子板(江東みどり、齋藤緑雨、画年恒、月耕「今日」(1・2)2・6) 査列の唐歌、班の義勇、乱咲自由花(齋藤緑雨、自由燈「1」(1・2)2・6) 3 鍛鉄場の主人(鷗外、加藤武平)「読売」(1・4)3・20 席話うそとまこと(岡野半牧、画△芳経「朝日」(1・5)2・17) 36回 慨世悲歌・照日葵(園遊外史「改造」(1・6)4・14) 小説富貴譚(無署名、画△芳経「朝日」(1・20)3・27 47回	(生) 木下利玄(1日) (没) 小野梓(14日、35歳)	○近世師範事蹟(松野静)「刊」? ○命士傳(道徳進人)「刊」? ○地獄傳信記(東葉散人)「刊」? ○二葉草四遠(坪内逍遙をはじめて訪ねる(1・24) ○北海道行を置く、函館・札幌・根室の3県を廃止する(1・26) ○全園人口三八一五万二二七名 ○戸数七七七万七六〇〇戸

▶本文組方見本

刊行にあたって

大正大学教授 林 亮勝

本書の編者高木健夫は、昭和四十九年(一九七四)に『新聞小説史』明治篇を公刊し、つづいて大正篇、昭和篇I・IIを刊行した。生涯を第一線のジャーナリストとして生きた著者の、まさにライフワークである。昭和篇II奥付けの発行日は、「昭和五十六年十一月二十五日」となっている。高木先生は同年六月七日に七十六歳の生涯を閉じた。没後、半年での出版である。病床でも『新聞小説史』と朝鮮民主主義人民共和国金日成主席の伝記の筆を執られていた。執念にも似た筆力で、この両著はほぼ完結を見た。

病床で、「年表篇と資料篇を出版したい」といわれていた。しかし先生の死で、その計画は頓挫してしまつた。収集された資料は膨大であり、資料篇の出版は個人の手にも負えるものではない。幸いに遺族の「研究資料としてまとめて保存したい」という気持と神奈川近代文学館の「保存しよう」という気持とが合致した。この橋渡しをしたのは高木健夫門下生の一人、青木雨彦さんである。

『新聞小説史』の資料は所を得た。「高木健夫文庫」として神奈川近代文学館に所蔵されている。「年表篇」の出版にはいくつかの困難があった。「年表篇」の出版計画は具体化していたが、まだ「完全原稿」にはなっていない。第一の点については、昭和四十年より助手として資料集めと年表作成の手助けをしていた柴塚予予さんがひきつづき全面的に協力して下さることになった。それは、もう一度、原物に当って原稿をチェックすることから始まるものである。高木門下は先生の没後も定期的な集まりを続けているが、その席上、「柴さんにお願ひするより手はない」という話になるのだが、その大きな労力と思うと切り出すことができなかつた。柴さんが、「お手伝いします」といつてくれた。その申し出がなかったら、本書は陽の日を見なかつたのである。

本書は高木先生の研究成果の凝集されたものであることはいまでもない。と同時に、柴さんの献身がなければ公刊に至らなかつた、といえるものもある。私は高木先生の古い門下生の一人として、「新聞小説史」昭和篇IIに、「あながきに代えて」を書き、該書が先生の没後に出版された経緯を述べた。いまここに、また、「はしがきに代えて」を書いた。「年表篇」出版を遺囑された門下生を代表してのものである。先生の七回忌を間もなく迎える。やつと約束が果たされたという安堵感でいっぱいである。柴さんに深く感謝したい。またこの出版に、研究資料の保存同様、深い理解を示された遺族の方々とも喜びを分かちあっている。有難うございました。

(「はしがき」に代えてよ)



テレビ小説と新聞小説

「ヨムニスト 青木雨彦

NHKの、朝のテレビ小説が評判である。よきにつけ、悪しきにつけ、話題になる。それこそ、よきにつけ、悪しきにつけ、その時代、時代の心を反映しているからだろ

う。  
「かつては、新聞小説があの役目を果たしていたのだ」  
というのが、いまは亡き高木健夫先生の口癖だった。先生は、  
「市民の関心が新聞小説からテレビ小説に移ったとき、新聞の衰退がはじまる」ともおっしゃっていた。

いまだ尾崎紅葉の『金色夜叉』や吉川英治の『宮本武蔵』を挙げるまでもなく、日本の大衆文学は新聞小説とともに歩んできた。まだまだ新聞小説を超えるテレビ小説はあらわれないが、いつの日かそんな日が来ないとも限らない。

先生の『新聞小説史年表』は、新聞の歴史そのものでもある。新聞が大好きな、そして新聞小説が大好きだった先生の魂をここにみる思いだ。

先輩新聞人への鎮魂歌

日本ペンクラブ名誉会員 荒垣秀雄  
日本自然保護協会会長

高木健夫君の新著『新聞小説史』の出版記念、古稀祝賀会が十二月七日、憲政記念館にあった。高木君の新聞小説史はもう十数年も前からやっている仕事で、前に「べん 史稿」として出したのをすっかり書き直したものである。こんどのは「明治篇」で、このあと大正、昭和篇と続く彼のライフワークものである。日本の小説は新聞と切っても切れぬ縁がある。文豪たちもみんな新聞連載小説によって世に知られ、大きく成長し、流行作家にもなれたわけだ。新聞の読者大衆なしに流行作家が生まれたものではない。日本の小説文学は新聞を離れては語れない。小説発達史は新聞発達史のなかにある。それなのに日本の文学史も文壇史も新聞という育ての親を無視し忘れたものが多い。高木君はこのことを座視できなかったのだ。また新聞の連載小説も初めは新聞記者が書いて評判になり、読者が新聞小説というものになじみ定着したその下地のうえに登場して、花と実をかちとったのだ。高木君はそれら先輩新聞人への鎮魂歌の心持もあってこの本を書いたのだと思う。（「人聞連邦」昭和五〇年二月号より転載）  
（追記）私が文化庁の芸術選奨委員のとき、「新聞小説史」明治篇を推薦し、全員賛成で、文部大臣賞（評論部門）が彼に贈られた。さらに、大正篇、昭和篇が上梓されたら、まとめて「菊池寛賞」に推薦しようと思っていたのだが……。

変ぼうする新聞小説

「よみうり寸評」子  
読売新聞取締役、論説委員

村尾清一

紅葉の「金色夜叉」、漱石の「三四郎」、芥山の「大菩薩峠」、英治の「宮本武蔵」、蓮三の「望みなき不非ず」、文六の「自由学校」——三代にわたる日本の新聞小説の歴史も、年表がなければ、画面点晴を欠くうらみなしとしない。

高木健夫さんの「新聞小説史」（国書刊行会刊）は、昭和四十九年から明治、大正、昭和篇Ⅰ、Ⅱと十数年かかって出版されたが、最終の本「新聞小説史年表」が出た。

高木さんがライフワークの総仕上げとして心を残していたぶ厚い年表の遺稿は、高木門下の人々、特に助手の柴塚予子（しばさよこ）さんの献身によって、高木さんの没後六年で、一巻の書にまとめられた。

筆者の耳にお残る高木さんの持論のひとつ。「テレビドラマが、茶の間で女性的心をひきつける時代に、新聞小説が生きのびるためには、変わらなければならない」。

■高木健夫略歴

明治38年12月 福井市生まれ  
昭和2年4月 国民新聞社入社  
同 5年3月 読売新聞社社会部に移る  
同 6年9月 大阪毎日新聞社社会部に移る  
同 10年2月 長春で大新京日報創刊  
同 13年9月 南京支局長  
同 14年5月 読売新聞退社、北京で東亜新報を創刊、主筆となる  
同 20年8月 北京で敗戦を迎え、国民政府中央宣伝部に留用される、華北日報日文版を担当  
同 21年3月 華北日報退社、5月婦岡三たび読売新聞入社、論説委員となる  
同 7月  
同 24年4月 コラム「編集手帳」担当  
同 31年4月 小説委員会委員となる  
同 35年12月 定年延長、コラム書き続ける  
同 47年11月 論説委員会顧問をやめる  
同 48年1月 読売新聞社社友となる  
同 49年3月 芸術選奨文部大臣賞受賞  
同 56年6月7日 長野県茅野市にて死去

主要著書

昭和18年6月	「北京横丁」	大阪屋号
昭和18年7月	「北京百景」	新民印書館
昭和27年6月	「生きている日本史」	鱈書房
昭和27年10月	「日本という名の独立国」	河出書房
昭和32年2月	「生きている中国史」	河出書房
昭和39年4月	「新聞小説史稿」	三友社
昭和42年4月	「紅衛兵」	合同出版社
昭和42年11月	「毛沢東の青春」	講談社
昭和44年2月	「東南アジアの夜明け」	読売新聞社
昭和45年5月	「唐詩選の旅」	講談社
昭和48年4月	「金日成謎物語」	番町書房
昭和49年12月	「新聞小説史 明治篇」	国書刊行会
昭和51年12月	「新聞小説史 大正篇」	国書刊行会
昭和53年4月	「白頭山に燃える」	現代史出版会
昭和53年5月	「新聞走馬灯」	地産出版
昭和55年12月	「北京歳時記」	永田書房
昭和56年11月	「新聞小説史 昭和篇Ⅰ」	国書刊行会
昭和56年11月	「新聞小説史 昭和篇Ⅱ」	国書刊行会



●「萬朝報」題字



●「春」作・島崎藤村、画・名取春仙  
東京朝日新聞 明治41年 第1回



●「蛇姫様」作・川口松太郎、画・岩田専太郎  
大阪毎日新聞—東京日日新聞 昭和14年 第2回

◆本書収録の挿絵の一部◆